

第79回 文化講座

「発掘調査速報2019」

【日時】令和元年8月10日（土）13:30～16:00

【会場】沖縄県立埋蔵文化財センター 研修室

もくじ

第79回文化講座

「発掘調査速報2019」

日時：令和元年8月10日（土）13:30～16:00

13:00 開場・受付

13:30 ごあいさつ 沖縄県立埋蔵文化財センター所長 城田久嗣

13:35 普天間石川原遺跡 発表者：荻堂匠美

13:55 鏡水原遺跡 発表者：大堀皓平

14:15 首里城跡（美福門磴道地区） 発表者：新垣力

14:30 休憩

14:40 真珠道跡 発表者：田村薰

15:00 松崎馬場跡 発表者：奥平大貴

15:10 首里高校内埋蔵文化財 発表者：玉城綾

15:40 質疑・応答

普天間石川原遺跡

沖縄県立埋蔵文化財センター

専門員 萩堂 匠美

1 調査に至る経緯

宜野湾市に所在する米軍基地キャンプ瑞慶覧内の住宅建設に伴い、沖縄県立埋蔵文化財センターでは平成16～19年度に試掘調査を実施し、普天間石川原遺跡、普天間グスクンニー遺跡、普天間下原古墓群を確認しました。調査規模が大きく、キャンプ桑江の返還にかかる重要な事案であることから、宜野湾市教育委員会より依頼を受け、現状のまま残すことができない埋蔵文化財の記録保存を目的とした緊急発掘調査を平成29年度より実施しています(図1)。

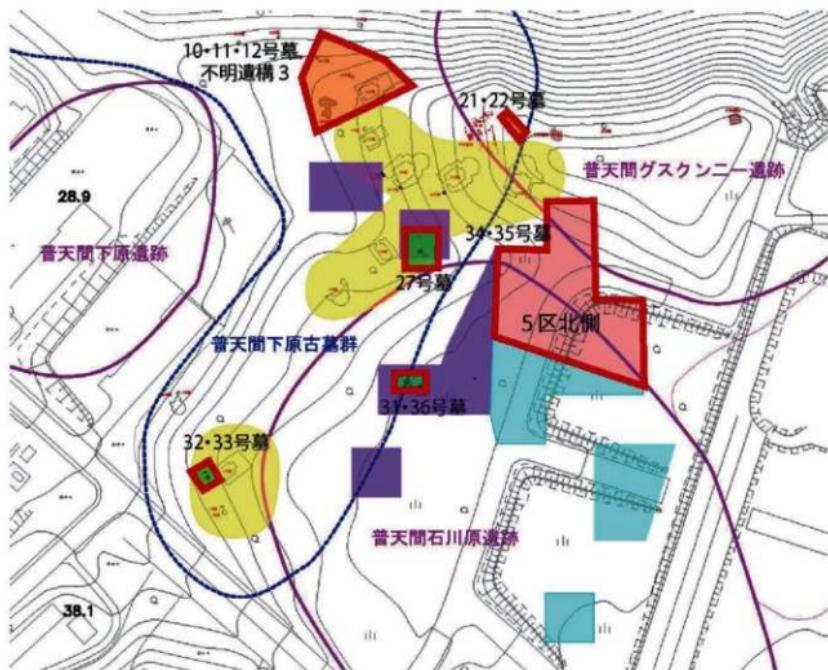


図1 発掘調査箇所

2 調査成果

【普天間石川原遺跡・普天間グスクンニー遺跡】

層序 層序はI～VI層が確認され(図2)、中に含まれる遺物などから、縄文時代、グスク時代、近世～近代の大きく3つの時期が確認されました。

- I層：現表土(造成土)
- II層：近世～近代
- III層：グスク時代
- IV層：縄文時代
- V層：赤土層
- VI層：琉球石灰岩の岩盤

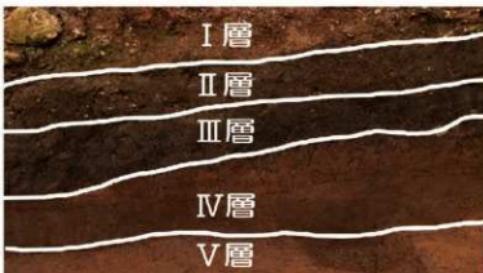


図2 層序

縄文時代 発掘調査により、谷地であったことが分かりました(図3)。谷は東側から西側に向かい緩やかに傾斜し、調査区中央では急激に落ち込みます。同箇所の縁辺部では集石遺構が1基確認されましたが、詳細な性格は不明です。遺物は縄文時代後期～晩期の土器や石斧・石鎌といった石器が出土しています(図4)。



図3 完掘状況



図4 石斧出土状況

グスク時代 遺構は溝状遺構、ピット列(植栽痕)、炉跡、石列が確認されました。中でも、ピット列(図5)は形状から植栽痕と考えられ、耕作地としての利用が窺えます。遺物は青磁などの中国産陶磁器やグスク土器が出土しています(図6)。



図5 ピット列検出状況



図6 青磁出土状況

近世～近代 遺構は溝状遺構や軌跡、道跡が確認されました。昭和20年に撮影された航空写真と比較すると溝状遺構や道跡が重なることから(図7・8)、道跡は普天間集落から安仁屋集落方面へ続く道の一部であり、溝状遺構は畑の区画であったと考えられます。遺物は沖縄産や本土産陶磁器が出土しています。



図7 調査区遺構検出状況

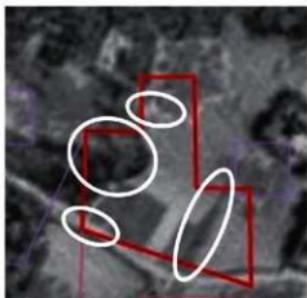


図8 戦前の航空写真

【普天間下原古墓群】

普天間下原古墓群がある一帯では米軍による造成が盛んに行われており、埋没している古墓が多くみられました。そのため、調査時に新規で発見される古墓も多く、なかには人骨を伴うものも確認されました。人骨を伴う場合、所有者を探すための墓地広告を1年間実施する必要があるため、平成30年度は墓地広告を終えた古墓・新規の古墓を含め、9基の古墓調査を実施しました。古墓群は西側に広がる斜面を利用し、形成されていました。墓は近世～近代の掘込墓(図9)、平葺墓(図10)、破風墓(図11)が確認され、袖垣に小さな掘込墓(仮墓)を伴うものもみられました。墓室内に蔵骨器が納められていた墓は3基でいずれも人骨が残っており(図12)、副葬品とみられる金属製品が納められているものもありました(図13)。人骨については有識者を呼び、現場にて確認作業を行いました(図14)。

墓の種類

掘込墓：斜面や岩盤に横穴を掘り込んだもの。正面は装飾されない。

平葺墓：正面を装飾した掘込墓。屋根が平板、眉が一直線をなすもの。

破風墓：正面を装飾した掘込墓。屋根が破風形(切妻形)をなすもの。

仮墓：特殊な死亡の際に一時的に遺骸を安置する墓。本墓の袖垣に穴を掘り、石を積んで造るもの。



図9 堀込墓



図10 平葺墓



図11 破風墓・仮墓



図12 墓室内の藏骨器状況



図13 厨子甕内の人骨・金属製品出土状況



図14 人骨確認作業風景

3まとめ

- ①普天間石川原遺跡、普天間グスクンニー遺跡では縄文時代・グスク時代・近世～近代の複数時期の遺構や遺物を確認。
- ②グスク時代や近世～近代はピット列(植栽痕)や溝状遺構から耕作地として利用されていた可能性がある。
- ③古墓調査では、掘込墓・平葺墓・破風墓といった複数形式の古墓を確認。
- ④発掘調査は令和元年度も継続して実施中。
- ⑤調査成果は報告書刊行や公開活用できるように資料整理も実施中。

鏡水原遺跡

沖縄県立埋蔵文化財センター

主任 大堀 皓平

1 発掘調査の経緯と目的

小禄道路 観光客の増加や都市の発展によって生じている那覇空港周辺の慢性的な交通渋滞を解消するため、内閣府沖縄総合事務局南部国道事務所（南部国道事務所）は那覇空港自動車道（国道 506 号線）を「小禄道路」として延伸することになりました。

工事範囲内の遺跡 小禄道路の工事予定地について、那覇市市民文化部文化財課（那覇市文化財課）が平成 28 年度に試掘調査を行った結果、ミノシン毛古墓群、らくだ山戦争遺跡群 A 地点、らくだ山戦争遺跡群 B 地点、鏡水水溜屋原 B 遺跡、鏡水原遺跡、鏡水増過原遺跡が新たに確認されました。これを踏まえて、南部国道事務所・那覇市文化財課・沖縄県教育委員会文化財課との間で協議を重ね、沖縄県立埋蔵文化財センターが鏡水原遺跡の西側 391m の発掘調査を実施することになりました。

2 鏡水原周辺の環境と鏡水

遺跡周辺の地理的環境 鏡水原遺跡は、地質上では島尻層の西端部の微高地に位置しています。その西側（那覇空港が位置している箇所）は標高 2 ~ 3 m 程度の沖積層で、縄文時代中期頃までは海水面の下だったと考えられます。鏡水原遺跡の北側には、琉球層群琉球石灰岩が微丘陵上に分布しています（図 1）。

周辺の遺跡 鏡水原遺跡の周辺には、縄文時代早期～中期と弥生～平安並行時代前半期の鏡水箕隅原 C 遺跡、縄文時代後期・晚期の鏡水箕隅原 A 遺跡と鏡水名座原 A 遺跡、弥生～平安並行時代後半期からグスク時代初頭の沖繩において初期農耕の痕跡が発見された那崎原遺跡が確認されています。遺跡の北側には拝所のある崎原グスクや屋良座森グスク、さらに小禄海軍飛行場やそれに伴う戦争遺跡が点在しています。

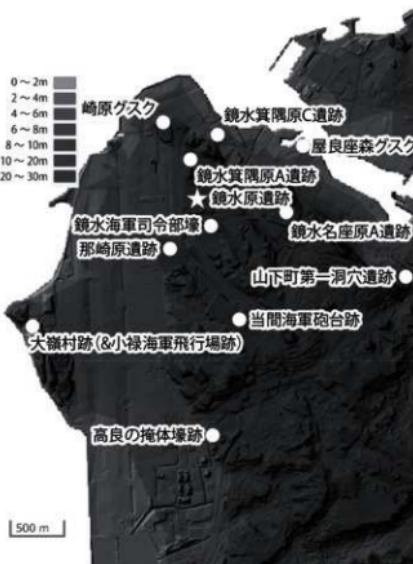


図 1 遺跡周辺の地形と主な遺跡

鏡水村（図2） 文献上の鏡水村は、琉球国由来記（1713年編纂）に、儀間村中の箕の形に似た洞穴が地名の由来であること、この洞穴には観音像と拝殿があるという記事が初出です。この伝承は、琉球国舊記（1730年編纂）にも箕觸宮の節や『遺老説伝』にも同様の記載があります。

鏡水は安次嶺村内の鏡水屋取として近世から近代初頭まで開墾されました。明治36年の土地整理によって、小禄間切安次嶺村・儀間村の一部を統合して新たに鏡水村が設置され、さらに明治41年には、町村制施行によって小禄村字鏡水となりました。農業が盛んで、特に「鏡水ダイコン」は全国的に有名な名産物でした。しかし1931（昭和6）年の小禄飛行場建設の土地買収以降、昭和10、13、16年と空港の拡張工事に伴って字の一部が買収され、また空港周辺には日本軍の壕が構築されました。このように軍施設が集中していることから、米軍の攻撃に晒され、集落は戦禍とその後の米軍による基地造成によって失われました。戦後は鏡水の過半が米軍基地内となり、沖縄の本土復帰後は陸上自衛隊那覇駐屯地として今日に至っています。

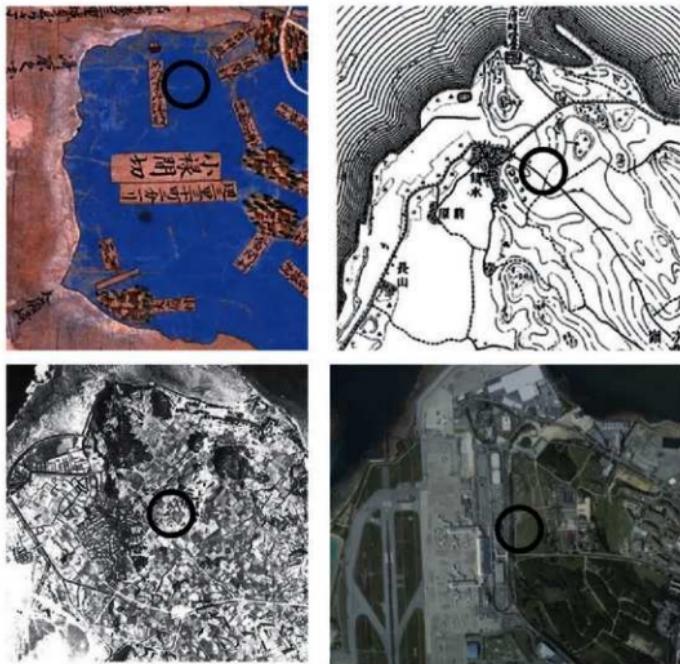


図2 地図・写真でみる遺跡周辺の移り変わり（○が発掘調査個所）

上段左：「間切図」（1750年ごろ、沖縄県立博物館・美術館所蔵）

上段右：大正8年陸地測量部参考本部作成地図（国土地理院所蔵）

下段左：1945年1月航空写真（沖縄公文書館） 下段右：現在

3 発掘調査の成果

地層と年代 発掘調査によって、大きく7つの地層を確認することができました（図3）。それぞれの地層は、中に含まれていた遺物や理化学的な年代測定によって、以下のように推定されます。

- I層：戦後～現代の地層
- II層：近世～近代の耕作層
- III層：ゲスク時代の地層
- IV層：縄文時代の遺物が混ざる層
- V層：縄文時代の遺物が混ざらない層
- VI層：赤土層
- VII層：琉球石灰岩の岩盤

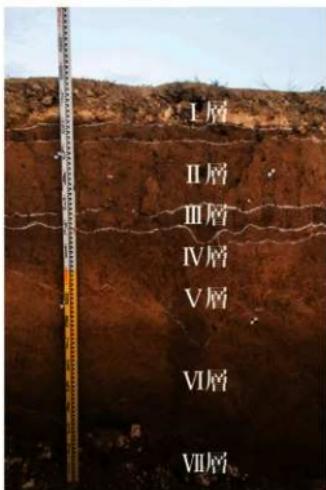


図3 鏡水原遺跡の地層

理化学的な年代分析の結果からは、III層の土は概ね今からおよそ1000年前頃のゲスク時代開始前後のものであることが分かります。また、IV層は出土する土器よりも古い年代ですが、鏡水原遺跡の北側にある鏡水窯陶器C遺跡と関係すると考えられます。VI層の炭化物は、旧石器時代の年代値となっています。これは鏡水原遺跡の東にある山下町第一洞穴遺跡と関係するかも知れません（表1）。

表1 鏡水原遺跡の放射性炭素年代測定値

地層	試料	測定年代	暦年較正年代				
			暦年代		較正年代		
II層	SD1-3ベルト2	炭化物	105±20	cal AD 1688 - cal AD 1927	263 -	24	cal BP
	SD1-3ベルト3	炭化物	155±20	cal AD 1667 - cal AD 1949	284 -	1	cal BP
	SD1-3ベルト2	炭化物	170±20	cal AD 1665 - cal AD 1950	285 -	0	cal BP
	SD1-3ベルト3	炭化物	180±20	cal AD 1663 - cal AD 1950	287 -	0	cal BP
III層	SD1-3ベルト3	炭化物	255±20	cal AD 1529 - cal AD 1798	421 -	152	cal BP
	III層 (SP40)	炭化物	1070±20	cal AD 900 - cal AD 1019	1050 -	931	cal BP
	III層 (SP38)	炭化物	1080±20	cal AD 898 - cal AD 1017	1053 -	934	cal BP
	III層 (SP38)	炭化物	1150±20	cal AD 777 - cal AD 970	1174 -	980	cal BP
IV層	III層 (SP42)	炭化物	1510±20	cal AD 434 - cal AD 606	1516 -	1345	cal BP
	IV層	炭化物	6725±25	cal BC 5707 - cal BC 5573	7656 -	7522	cal BP
	VI層	炭化物	26260±100	cal BC 28926 - cal BC 28359	30875 -	30308	cal BP

1) yrBP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。

2) 暦年較正は0xcal4.3、較正曲線はIntcal13を用いる。

近世・近代の遺構と遺物（II層） この時代からは、溝状遺構が多数確認されています。これら溝状遺構の形を見てみると、複数の溝によって方形に区画が形成されていることが分かります。このことから、土地区画を示す溝であると考えられます。溝を埋める土の中からは近世・近代の遺物が出土しましたので、年代測定の成果と一致します。溝状遺構は上部が後世に削られてしまったためか深さが総じて深度0.5mに満たない状況でしたが、北側の溝状遺構（SD1）のみは深度1.0m以上の規模の大きいものでした。さらにこのSD1は、近世・近代・戦争時の3度に渡る改変が行なわれていることが発掘調査で分かりました。近世から近代にかけての土地利用の変遷過程を示す成果と言えます。

遺物は沖縄で作られた陶磁器や日本で近代に作られた陶磁器を中心ですが、他に中国で作られた陶磁器も若干含まれます。ほかに特徴的な遺物として、海で採れる多種多様な貝が出土しました。当時の鏡水に暮らす人たちが盛んに海に出ていたことを示す資料です。



図4 近世・近代の遺構と遺物

上段左：遺構検出状況写真 上段右：溝状遺構（SD1）断面

下段左：SD1 に隣接する石敷遺構（SX3）遺物出土状況

下段右：SX3 から出土した主な陶磁器

グスク時代（Ⅲ層） 穴（ピット）数基が検出されましたが、分布に規則性が認められないため、性格は不明です。理化学分析からはほとんど同じ年代値が得られているので、同時代のものと考えられます。また遺物には中国産の青磁や白磁などが僅かに出土しています。



図5 グスク時代の遺構と遺物
左：ピット半截断面　右：グスク時代の主な陶器

縄文時代（IV層） この時代の遺構は発見されませんでしたが、調査区北西側及び東側には土器や石器等をまばらに包む地層が確認されました。土器の特徴からは、縄文時代晩期（約2500年前）ごろのものと考えられます。また、石器の石材であるチャートや石英、緑色片岩、輝緑岩などは沖縄本島北部や慶良間諸島で探ることのできる岩石や鉱物であることから、この時代に鏡水に暮らした人々の活発な活動を窺い知ることができます。

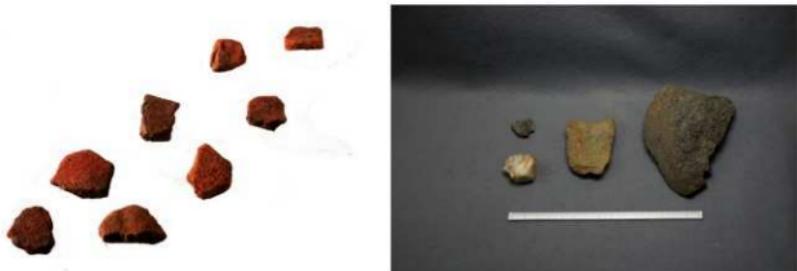
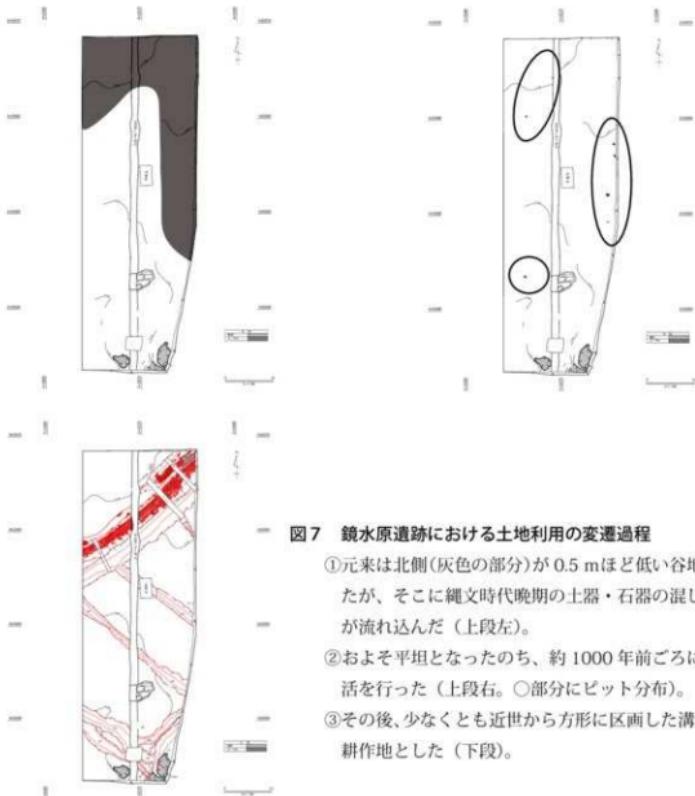


図6 縄文時代晚期ごろの遺物
左：土器　右：石器

4 まとめ

- ① 発掘調査によって、鏡水原遺跡からは近世～近代、グスク時代、縄文時代の3つの時代の遺構や遺物が発見されました。
- ② 発見された遺構や遺物からは、近世・近代が文献や地図・写真などの記録のとおり耕作地であったこと、また海産資源を活発に利用していたことが分かりました。
- ③ グスク時代や縄文時代の遺構や遺物が発見されたことで、文献の記録上よりも前から人々が暮らししていたことが分かりました。
- ④ 特に縄文時代晩期の遺物が発見されたことは、周辺にこの時代の遺跡が見つかっていないことから、縄文時代後期の鏡水箕隈原A遺跡・鏡水名座原遺跡と弥生～平安並行時代前半期の鏡水箕隈原C遺跡との間の空白期間を埋めることになり、注目されます。
- ⑤ ④を踏まえると、小禄地域は旧石器時代から近代までの遺跡が発見されていて、人々が数万年前から連綿と暮らし続けてきた地域であることが分かりました。



首里城跡（美福門磴道地区）

沖縄県立埋蔵文化財センター

主任専門員 新垣 力

1 調査概要

遺構：「美福門前の階段」

尚巴志王代（1422～39年）創建と伝わる美福門から南東方向に延びる階段を検出しました。この階段は磴道と称されるもので、緩やかに傾斜する幅広の踏面と、高い蹴上を有します。

階段は、平成26年度の調査（繼世門北地区）で1段～14段まで確認していますが、今回は10段～13段の西側延長部分に加え、13段の西端で側面を検出しました。この結果、階段の幅員が13段部分で約5.7mを測ることや、西側面の状況から階段の構築方法（琉球石灰岩の基盤層を階段状に加工し、その上に石材を敷設）などが判明しました。ちなみに、絵図では階段の両端に石積みが描かれており、東側の石積みは平成26年度に検出されていますが、西側の石積みは確認されていません。西側石積みは平成9年度の調査（二階殿地区）でも未検出のため、沖縄戦または戦後の造成で破壊された可能性が高いと考えられます。



図1 史跡「首里城跡」の位置

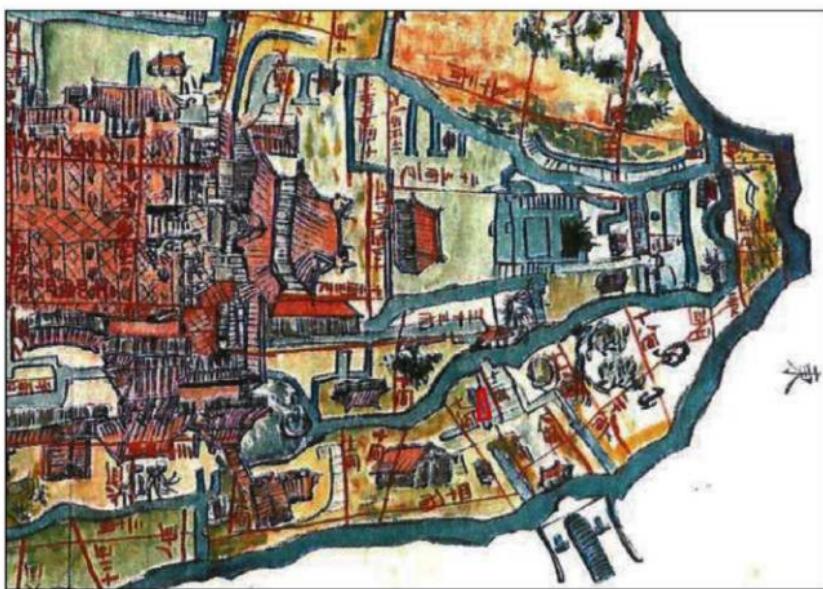


図2 「首里城絵図（17世紀後半～18世紀初頭作成）」にみる平成30年度調査区

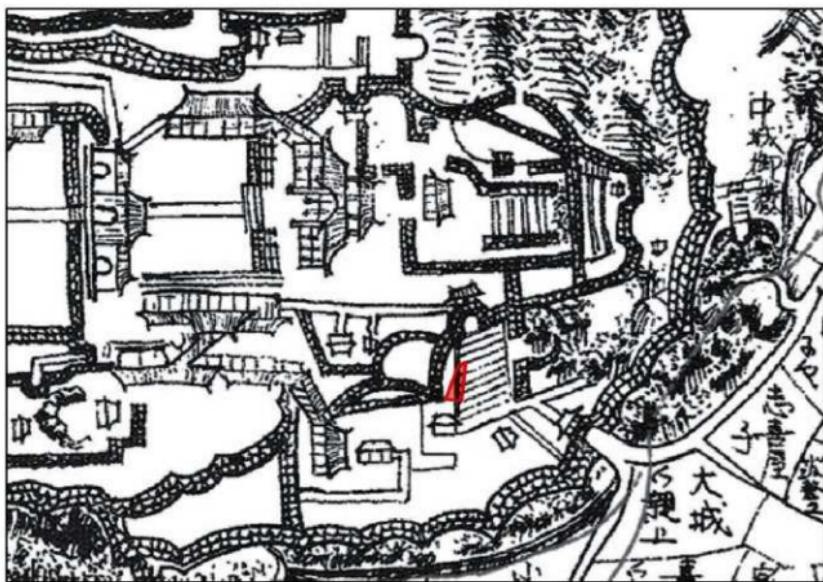


図3 「首里古地図（18世紀初頭作成）」にみる平成30年度調査区



図4 「沖縄県首里旧城図（明治初期作成）」にみる平成30年度調査区

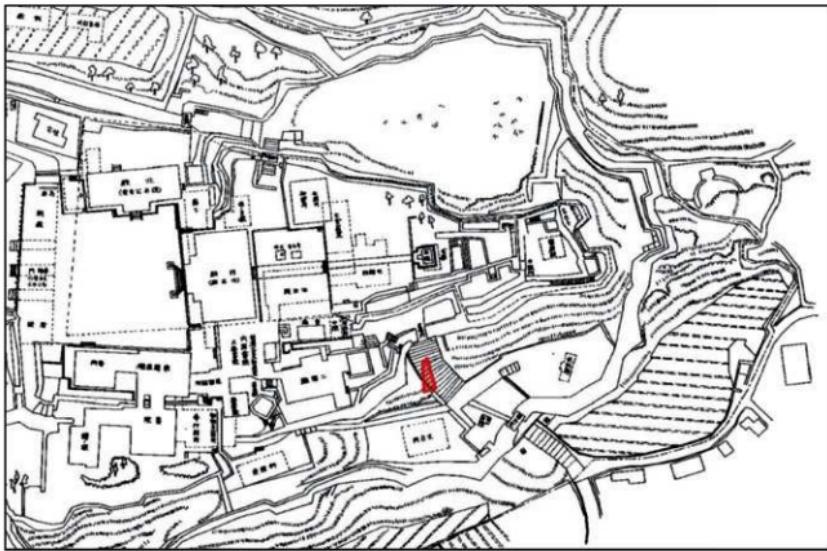


図5 「旧首里城図（昭和6年頃作成）」にみる平成30年度調査区

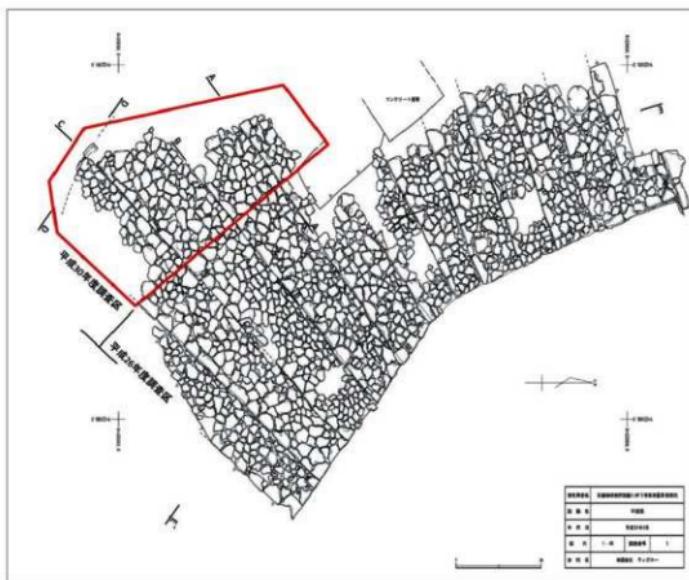


図6 美福門前階段 平面図（平成 26 年度調査区との合成）
※赤線の範囲が平成 30 年度調査区

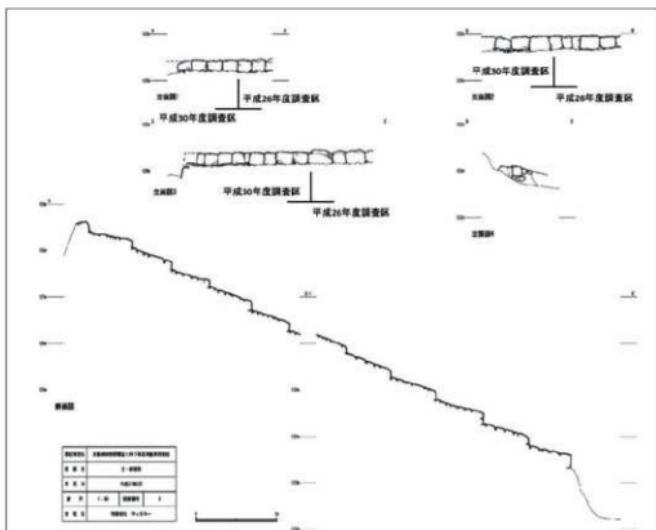


図7 美福門前階段 立面図・断面図（平成 26 年度調査区と合成）

真珠道跡

沖縄県立埋蔵文化財センター

主任 田村 薫

真珠道跡 補足資料1

※詳細については図録を参照



真珠道跡 補足資料2

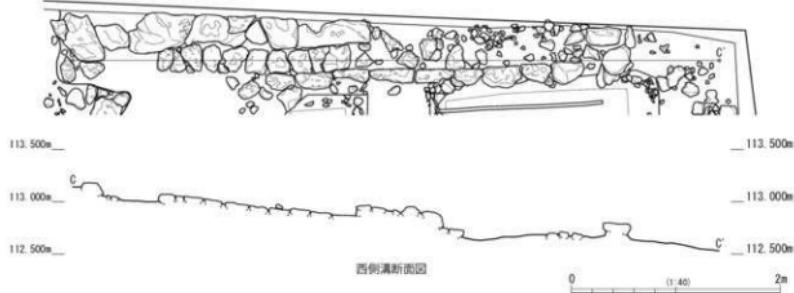
※詳細については図録を参照



真珠道路跡 補足資料3

*詳細については図録を参照

西側溝



西側溝近景（南より北を望む）

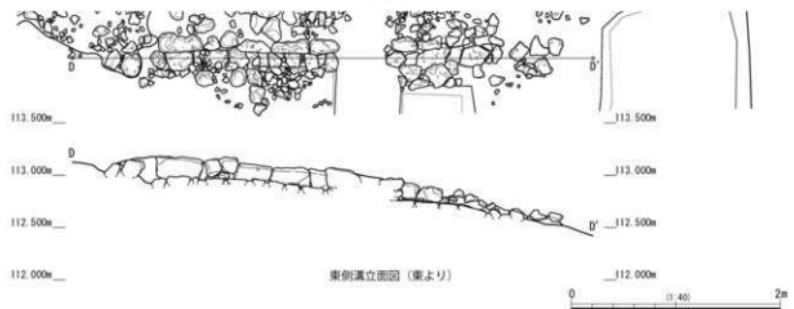


西側溝近景（北より南を望む①）



西側溝近景（北より南を望む②）

東側溝



東側溝近景（北より南を望む）



東側溝近景（南より北を望む①）



東側溝近景（南より北を望む②）

松崎馬場跡

沖縄県立埋蔵文化財センター

専門員 奥平 大貴

用語の説明

発掘調査では以下の言葉が多く使われます。

○遺構

過去の人類が残した構築物。不動産的なもの。竪穴住居、柱跡、石積み、石垣など。

○遺物

過去の人類が残した物。動産的なもの。土器、石器、茶碗、貝のアクセサリーなど。

○トレンチ

遺跡の地下の様子を確かめるために掘る溝。

1はじめに

松崎馬場跡の発掘調査は、県営首里城公園の整備にともなう遺跡の範囲と内容確認を目的とした調査です。過去には、平成21年度と平成23年度に調査が行われ、近世の造成層、近代の造成層、道跡などが見つかっています。

2松崎馬場跡の概要

松崎馬場跡とは、龍潭の北東側に面する広場および道跡の残る遺跡です。かんせん の とき う
きけいえの せ
わとう ようさん まつざき の す『冠船之時御座構之図』に収められている「重陽宴松崎之図」には、1866年の冊封使来流時に爬龍船競争を観覧し、もてなした際の会場の設営状況が描かれています。

1801年には東側に隣接する場所に首里王府の教育機関である国学が設置され、廃藩置県後の1886(明治19)年には沖縄県師範学校が国学跡に設置されました。しかし、1945(昭和20)年の沖縄戦で師範学校の校舎は破壊され、戦後は小学校敷地や琉球大学男子寮を経て、現在は沖縄県立芸術大学当蔵キャンパスに隣接する場所に国学跡の石牆、石溝、階段が残っています。



図1 松崎馬場跡の位置

3 調査内容

2009（平成21）、2011（平成23）年度の調査は、過去の道跡を復元するための基礎データを得る目的で行われ、平成23年度調査のトレンチ2において、道の縁石と路面に敷かれた石粉が検出されました。

今回の調査では、平成23年度調査のトレンチ番号から続けてトレンチ3、トレンチ4の2ヶ所を設定し、調査を行いました。

トレンチ4では遺構は見つかりませんでしたが、トレンチ3では沖縄県師範学校の時期と考えられる石牆や、それにともなう石溝、階段遺構が見つかりました。現在地表面で確認できる階段のほかにもうひとつの階段が確認できたことはひとつの成果です。階段と石牆のあいだには琉球石灰岩製の蓋が残されており、暗渠であったことも確認できました。

今回の調査の出土遺物は、中国産青磁や中国産白磁、中国産染付、本土産陶磁器、沖縄産陶器、瓦、レンガなどが出土しています。

4 今後の計画

今回の調査で確認した遺構は、現地で図面や写真などの記録を行った後、遺構保護を行いながら埋め戻し、現地保存を行っています。また、今回得られた調査成果を整理し、今年度内に調査報告書を刊行する予定です。



図2 平成23年度、トレンチ2にて検出した道路



図3 現存する师范学校時期の階段



図4 トレンチ3完掘状況



図5 トレンチ3階段遺構検出状況



図6 トレンチ3階段遺構検出状況

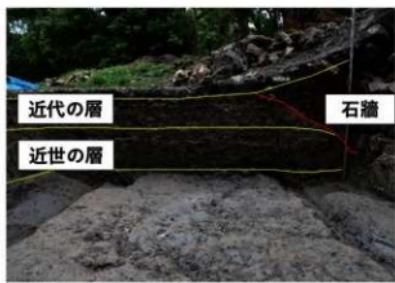


図7 トレンチ3壁面

参考文献

- ・岩波書店 1998 「遺構」 p132, 「遺物」 p184, 「トレンチ」 p1956『広辞苑』岩波書店
- ・上原靜・島袋洋 1991「首里国学・孔子廟跡の調査」『文化課紀要 第7号』沖縄県教育委員会
- ・沖縄県立埋蔵文化財センター 2017『松崎馬場跡－県営首里城公園 松崎馬場跡発掘調査報告書(1)－沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第91集』沖縄県立埋蔵文化財センター

首里高校内埋蔵文化財

沖縄県立埋蔵文化財センター

主任 玉城 純

1 首里高校内の遺跡

首里高校の敷地内には、首里古地図に描かれている近世の遺跡だけでも中城御殿跡、大美御殿跡、かぢ木植所、浦添按司など多くあり、その他にもグスク時代の遺構もあります。

主な遺跡

- ・中城御殿跡…1621～40年の尚豊王代に建てられた、琉球王国の時期国王となる、世子が住む邸宅。1875（明治8）年、龍潭向かいの県立博物館跡地へ移転。
- ・大美御殿跡…首里城御内原付属の別邸で冠婚葬祭の礼式を行ったとされる。もとは尚清王（1487年即位）が世子時代の邸宅。
- ・かぢ木植所…櫛園跡とも言われる。ろうそくや漆器の原料を採取するための栽培園と考えられる。

2 過年度の発掘調査成果

平成25～26年度 以前のグラウンド部分を調査し、中城御殿跡に関連する石積みや井戸、グスク時代の柱穴跡などが確認されました。

平成29年度 中城御殿北側の石積みとそれに付随する門や、屋敷内の石積み、グスク時代の柱穴跡などが確認されました。

平成25～26年度に行われた発掘調査の成果は、報告書としてまとめられ平成29年に刊行しました。

近世の中城御殿関連を中心に、それよりも古いグスク時代の遺構が確認されています。



図1 首里古地図との重ね図

3 平成 30 年度の発掘調査成果

中城御殿跡 平成 29 年度調査に確認された中城御殿北側の石積みの続きと、東側の石積みが確認され、このことにより、中城御殿跡の範囲が明確にわかるようになりました。また、平成 29 年度に検出した 2 種類の石材を用いた石積みの続きも確認されました。



図 2 中城御殿跡の屋敷内石積み

道跡 中城御殿跡とかち木植所跡の間を通る道で、幅は約 5 メートル、路面は碎いた石灰岩を敷き固め、両側には石の側溝があります。路面の中央は高くなり側溝へ水が流れる構造で、造成層の一番下は礫層で、水はけを意識して作られたと考えられます。近世琉球の大規模な造成工事の痕跡も壁面から確認することができました。



図 3 遺跡と石積み



図 4 造成工事の痕跡



図5 遺跡と中城御殿跡

その他 かち木植所は近代の造成によってほとんど削平されておりました。

グスク時代の遺構は、石組みもありましたが、そのほとんどは柱穴跡でした。柱穴跡は集中する部分があり、建物の単位や建て替えなどをうかがい知ることができます。



図6 柱穴跡

4 最後に

遺跡を縫うように、校舎のコンクリート基礎や配管が走っていましたが、その周辺は遺跡がしっかりと残っていました。これらの調査成果を、多くの方に見ていただきたいということで3月2・9日に現地説明会を行いました。当初は1日の予定でしたが、応募多数により急遽、2日行うことになりました。2日目は、あいにくの雨模様でしたが多くの方にご来跡いただきました。那覇市は開発が多い地域ですがその下には遺跡が残っており、校舎の下には琉球王国の街並みが広がっていました。

参考文献

- ・沖縄県立埋蔵文化財センター 2017 『中城御殿跡（首里高校内）—首里高校校舎改築に伴う発掘調査』 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第93集
- ・沖縄タイムス社 1983 『沖縄大百科事典 上巻』

次回の催し物のご案内

令和元年度 埋蔵文化財公開活用合同企画

「掘り出された戦前の沖縄 —基地内調査を中心に—」

会期 10月23日(水)～12月1日(日)

時間 9:00～17:00(入所は16:30まで)

場所 当センター企画展示室

◆関連講座（全4回）◆

①第80回文化講座 日時：11月2日(土)

テーマ：「掘り出された戦前の沖縄－近年の発掘調査成果Ⅰ」

②第81回文化講座 日時：11月9日(土)

テーマ：「掘り出された戦前の沖縄－近年の発掘調査成果Ⅱ」

③第82回文化講座 日時：11月23日(土・祝)

テーマ：「発掘された沖縄の近代遺跡

～うみ・やま・むら・みちの近代化モノ語り～」

講 師：宮城弘樹氏(沖縄国際大学)

④第83回文化講座 日時：11月30日(土)

テーマ：「地域社会と近世・近代の遺跡・文化財」

講 師：坂井秀弥氏(奈良大学)

※いずれも当センター研修室にて開催。参加費無料、各定員140名(申込不要)。

沖縄県立埋蔵文化財センター

〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原 193-7

TEL 098-835-8751

【開所時間】午前9時～午後5時(入所は午後4時30分まで)

【休 所 日】毎週曜日、国民の祝日(子どもの日、文化の日を除く)

年末年始、慰労の日(6月23日)

※今年度のみ、11月23日(勤労感謝の日)は開所

※月曜日が祝日となった時は、翌日の火曜日も休所

※その他、臨時休所有り